

寺田寅彦

どんぐり



ど
ん
ぐ
り

もう何年前になるか思い出せぬが日は覚えている。暮れもおし詰まった二十六日の晩、妻は下女を連れて下谷したや摩利支天まりしてんの縁日へ出かけた。十時過ぎに帰って来て、袂たもとからおみやげの金鍰きんつばと焼き栗ぐりを出して余のノートを讀んでいる机のすみへそつとのせて、便所へはいったがやがて出て来て青い顔をして机のそばへすわると同時に急に咳せきをして血を吐いた。驚いたのは当人ばかりではない、その時余の顔に全く血のけがなくなつたのを見て、いっそう気を落としたとこれはあとで話した。

あくる日下女が薬取りから帰ると急に暇をくれと言い出した。このへんは物騒で、お使いに出るときつといやないたずらをされますので、どうも恐ろしくて不気味で勤まりませぬと妙な事を言う。しかし見るとおりの病人をかかえて今急におまえに帰られては途方にくれる。せめて代わりの人のあるまで辛抱してくれと、よしやまだ一介の書生にしろ、とにかく一家の主人が泣かぬばかりに頼んだので、その日はどうやら思い止まったらしかったが、翌日は国元の親が大病とかいうわけですとうとう帰ってしまふ。掛け取りに来た車屋のばあさんに頼んで、

なんでもよいからと桂庵けいあんから連れて来てもらったのが美み代よという女であつた。仕合わせとこれが氣立てのやさしい正直もので、もつとも少しぼんやりしていて、たぬきは人に化けるものだというような事を信じていたが、とにかく忠実に病人の看護もし、しかられても腹も立てず、そして時にしくじりもやつた。手ちよう水鉢ずばちを座敷のまん中で取り落として洪水こうずいを起こしたり、火燵こたつのお下がりを入れて寝て蒲団ふとんから畳まで径一尺ほどの焼け穴をこしらえた事もあつた。それにもかかわらず余は今に至るまでこの美代に対する感謝の念は薄らぐがぬ。

病人の容体はよいとも悪いともつかぬうちに年は容捨なく暮れてしまう。新年を迎える用意もしなければならぬが、何を買ってどうするものやらわからぬ。それでも美代が病人のさしずを聞いてそれに自分の意見を交ぜて一日忙しそうに働いていた。大晦日おおみそかの夜の十二時過ぎ、障子のあんまりひどく破れているのに気がついて、外套がいたうの頭巾ずきんをひっかぶり、皿さら一枚をさげて森川町もりかわちようへ五厘の糊のりを買いに行ったりした。美代はこの夜三時過ぎまで結びごんにやくをこしらえていた。

世間はめでたいお正月になって、暖かい天気が続く。

病人も少しずつよくなる。風のない日は縁側の日向ひなたへ出て来て、紙の折り鶴づるをいくつとなくこしらえてみたり、秘蔵の人形の着物を縫うてやったり、曇った寒い日は床の中で「黒髪」をひくくらいになった。そして時々心細い愚痴っぽい事を言つては余と美代を困らせる。妻はそのころもう身重になつていたので、この五月には初産ういざんという女の大難をひかえている。おまけに十九の大厄たいやくだと言う。美代が宿入りの夜など、木枯らしの音にまじる隣室のさびしい寝息を聞きながら机の前にすわつて、ランプを見つめたまま、長い息をすることもあつた。妻は医

者の間に合いの気休めをすっかり信じて、全く一時的な
気管の出血であつたと思つていたらしい。そうでないと
信じたくなかつたのである。それでもどこにか不安な
念が潜んでいると見えて、時々「ほんとうの肺病だつて、
なおらないときまつた事はないのでしようね」とこんな
事をきいた事もある。またある時は「あなた、かくして
いるでしよう、きつとそうだ、あなたそうでしよう」と
うるさく聞きながら、余の顔色を読もうとする、その祈
るような氣づかわしげな目づかいを見るのが苦しいから
「ばかな、そんな事はないと言つたらない」と邪慳じやけんな返

事で打ち消してやる。それでも一時は満足する事ができたようであった。

病気は少しずつよい。二月の初めには風呂風呂にも入る、髪も結うようになった。車屋のばあさんなどは「もうスツカリ御全快だそうで」と、ひとりできめてしまつて、そつとふところから勘定書きを出して「どうもたいへんに、お早く御全快で」と言う。医者医者の所へ行つて聞くと、よいとも悪いとも言わず、「なにしろちようど御妊娠中ですからね、この五月がよほどお大事ですよ」と心細い事を言う。

それにもかかわらず少しづつよい。月の十何日、風のない暖かい日、医者 of 許可を得たから植物園へ連れて行ってやると言うたいへんに喜んだ。出かけるとなつて庭へおりと、髪があんまりひどいからちよつとなでつけるまで待つてちようだいと言う。ふところ手をして縁へ腰かけてさびしい小庭を見回す。去年の枯れ菊が引かれたままで、あわれに朽ちている、それに千代紙の切れか何か引つ掛かつて風の無いのに、寒そうにふるえている。手水鉢ちようずばちの向かいの梅の枝に二輪ばかり満開したのがある。近づいてよく見ると作り花がくつつけてあつ

た。おおかた病人のいたずららしい。茶の間の障子のガラス越しにのぞいて見ると、妻は鏡台の前へすわって解かした髪を握ってぱらりと下げ、櫛くしをつかっている。ちよつとなでつけるのかと思つたら自分で新たに巻き直すに見える。よせばよいのに、早くしないかとせき立てておいて、座敷のほうへもどつて、横になつてけさ見た新聞をのぞく。早くしないかと大声で促す。そんなにせき立てると、なおできやしないわと言う。黙つて台所の横をまわつて門へ出て見た。往来の人がじろじろ見て通るからしかたなしに歩き出す。半町ばかりぶらぶら歩いて

振り返ってもまだ出て来ぬから、また引っ返してもと来たとおりに台所の横から縁側へまわつてのぞいて見ると、妻が年がいもなく泣き伏しているのを美代がなだめている。あんまりだと言う。一人でどこへでもいらっしやいと言う。まあともかくもと美代がすかしなだめて、やつと出かける事になる。実にいい天気だ。「人間の心が蒸発して霞かすみになりそうな日だね」と言ったら、一間けんばかりあとを雪駄せつたを引きずりながら、大儀そうについて来た妻は、エ、と気のない返事をして無理に笑顔えがおをこしらえる。この時始めて気がついたが、なるほど腹の帯の所が

人並みよりだいぶ大きい。あるき方がよほど変だ。それでも当人は平気でくつついて来る。美代と二人でよこせばよかったと思ひながら、無言で歩調を早める。植物園の門をはいつてまっすぐに広いたらたら坂を上って左に折れる。穏やかな日光が広い園にいっぱいになって、花も緑もない地盤はさながら眠ったようである。温室の白塗りがキラキラするようでその前に二三人ふところ手をして窓から中をのぞく人影が見えるばかり、噴水も出ていぬ。睡蓮すいれんもまだつめたい泥どろの底に真夏の雲の影を待っている。温室の中からガタガタと下駄げの音を立てて、田舎いなか

のばあさんたちが四五人、きつねにつままれたような顔を
をして出て来る。余らはこれと入れちがつてはいる。活
力の満ちた、しめっぱい熱帯の空気が鼻のあなから脳を
襲う。椰子の木や琉球りゅうきゅうの芭蕉ばしょうなどが、今少し延びた
ら、この屋根をどうするつもりだろうといつも思うので
あるが、きょうもそう思う。ハワイという国には肺病が
皆無だとだれかの言った事を思い出す。妻は濃緑に朱の
斑点はんてんのはいった草の葉をいじっているから「オイよせ、
毒かもしれない」と言ったら、あわてて放して、いやな
顔をして指先を見つめてちよつとかいでみる。左右の回

廊にはところどころ赤い花が咲いて、その中からのんき
そうな人の顔もあちこちに見える。妻はなんだか気分が
悪くなったと言う。顔色はたいして悪くもない。急にな
ま暖かい所へはいったためだろう。早く外へ出たほうが
よい、おれはもう少し見て行くからと言ったら、ちよつと
ためらったが、おとなしく出て行った。あかい花だけ見
てすぐ出るつもりでいたら、人と人との間へはさまって、
ちよつと出そこなって、やつと出て見ると妻はそこには
いぬ。どこへ行ったかと思回すと、はるか向こうの東屋^{あずまや}
のベンチへ力なさそうにもたれたまま、こつちを見て笑

っていた。

園の静けさは前に変わらぬ。日光の目に見えぬ力で地上のすべての活動をそっとおさえつけてあるように見える。気分はすっかりよくなったと言うから、もうそろそろ帰ろうかと言うと、少し驚いたように余の顔を見つめていたが、せつかく来たから、もう少し、池のほうへでも行ってみましようと言う。それもそうだとそっちへ向く。

崖がけをおりかかると下から大学生が二三人、黄色い声でアリストートルがどうしたとかいうような事を議論しな

がら上って来る。池の小島の東屋に、三十ぐらいのめがねをかけた品のいい細君が、海軍服の男の子と小さい女の子を遊ばせている。海軍服は小石を拾っては氷の上をすべらせて快い音を立てている。ベンチの上にはしわくちゃの半紙が広げられて、その上にカステラの大きな切れがのっている。「あんな女の子がほしいわねえ」と妻がいつにない事を言う。

出口のほうへと崖の下をあるく。なんの見るものもない。後ろで妻が「おや、どんぐりが」と不意に大きな声をして、道わきの落ち葉の中へはいつて行く。なるほど、

落ち葉に交じって無数のどんぐりが、凍いてた崖下がけしたの土にころがっている。妻はそこへしやがんで熱心に拾いはじめる。見るまに左の手のひらにいっぱいになる。余も一つ二つ拾って向こうの便所の屋根へ投げると、カラカラところがって向こう側へ落ちる。妻は帯の間からハンケチを取り出して膝の上へ広げ、熱心に拾い集める。「もう大概にしないか、ばかだな」と言ってみたが、なかなかやめそうもないから便所へはいる。出て見るとまだ拾っている。「いったいそんなに拾って、どうしようと言うのだ」と聞くと、おもしろそうに笑いながら、「だっ

て拾うのがおもしろいじゃありませんか」と言う。ハンケチにいったはい拾って包んでだいいじそうに縛っているから、もうよすかと思うと、今度は「あなたのハンケチも貸してちょうだい」と言う。とうとう余のハンケチにも何合かのどんぐりを満たして「もうよしてよ、帰りましよう」とどこまでもいい気な事をいう。

どんぐりを拾って喜んだ妻も今はない。お墓の土には苔こけの花がなんべんか咲いた。山にはどんぐりも落ちれば、鶉ひよどりの鳴く音に落ち葉が降る。ことしの二月、あけて六つになる忘れ形身のみつ坊をつれて、この植物園へ遊び

に来て、昔ながらのどんぐりを拾わせた。こんな些細なささい事にまで、遺伝というようなものがあるものだから、みつ坊は非常におもしろがった。五つ六つ拾うごとに、息をはずませて余のそばへ飛んで来て、余の帽子の中へひろげたハンケチへ投げ込む。だんだん得物の増して行くのをのぞき込んで、頬ほおを赤くしてうれしそうな溶けそうな顔をする。争われぬ母の面影がこの無邪気な顔のどこかのすみからチラリとのぞいて、うすれかかった昔の記憶を呼び返す。「おとうさん、大きなどんぐり、こいもくくくくみんな大きなどんぐり」と小さ

い泥どろだらけの指先で帽子の中に累々としたどんぐりの頭を一つ一つ突つつく。「大きいどんぐり、ちいちゃいどんぐり、みいんな利口などんぐりちゃん」と出たらめの唱歌のようなものを歌って飛び飛びしながらまた拾い始める。余はその罪のない横顔をじっと見入って、亡妻のあらゆる短所と長所、どんぐりのすきな事も折り鶴づるのじょうずな事も、なんにも遺伝してさしつかえはないが、始めと終わりの悲惨であつた母の運命だけは、この子に繰り返させたくないものだど、しみじみそう思ったのである。

(明治三十八年四月、ホトトギス)

日本文学電子図書館

どんぐり

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第一卷
岩波文庫

昭和45年8月20日 第38刷発行



日本文学電子図書館